

善と悪

「ジキル博士とハイド」

ロバート・ルイス・ステイブンスンの原作のパラマウント映画「ジキル博士とハイド」の梗概を紹介します。

それは百年ほど前のロンドンにおいてのことでありました。仲のいい二人の医学博士がありました。

ランソン博士とジキル博士がそれでありました。ジキル博士は「人間の善と悪との性質を薬によつて二分して、悪を解放すれば、悪は人間の体内から出てしまふ」という学説を発表しますが、友人のランソン博士をはじめとして、それは一種の空想であり、また人間としてなすべからざる不道德なことだとして笑殺されてしまいます。

ジキル博士は極めて善良な紳士でありました。街の貧民屈では、この慈悲深き医師をまるで天使の如く神の如く尊敬しています。博士にはミユリエル・ケリユウという美しい許嫁がありました。ミユリエルの父、ケリユウ將軍は厳格な人であつて、ジキル博士が貧民屈の施療病院の患者の面倒を見つつ、つい許婚のミユリエルとの約束におくることがあつたりするので、むしろ彼を嫌っているかのようにあります。そして博士が、何かしら、内部生命の衝動にかられて、早く結婚を許してくれというのをのびのびにして許してくれません。善良な紳士としてそれを強いてということも出来ません。

ジキル博士はある日、あやしい酒場で、アイヴィ・ピアアスンという女が、悪漢たちに傷つけられてゐるのを発見して、彼女をたすけてやり、その上その負傷を診察してやります。この怪しい女はジキル博士を性的に誘惑しようとはしますが、友人のランソン博士が来たので、その場をのがれました。しかしジキル博士は美しい女の肌を見ました。

間もなく、ジキル博士は、彼の研究室で、彼がかつて発表した「人間の善と悪とを二分する薬」の発見調剤に成功して、これを最後の実験に移さねばならなくなりました。幾種かの薬をコップに入れ、燃えたつ薬物を博士自身が一気に飲み干しました。博士は非常な苦しみに悶絶します。恐ろしいうめき声をあげつつ、研究室をのたうちまわつていましたが、その苦しみが薄らぐと共に、彼の顔貌、手、足、ことごとくが見る間に、悪鬼とも、猿ともとれぬ凶悪な怖るべきものに変つてしまいました。

解放された「悪」は体から出でず、かえつて体内に止つて「善」をおさえつけてしまつて、全く悪魔のものになつてしまいます。この恐るべき悪魔の名を「ハイド」と言います。天使ジキル博士が、悪魔ハイドになつた時、ハイドは叫びます。

「おお！ 俺は自由だ！ 俺は何ものをも怖れない。一切の偽善をかなぐりすてた自由人だ！」

だがそれは自由であつたでしょうか。そしてその物すごい笑みが、彼を真に生かすものであつたでしょうか。

彼の忠僕エドガアが、この物音におどろいて戸をノックしている間に、彼は再び薬を飲むと、苦悶の後、又神士ジキル博士になっていました。

許嫁ミユリエルと結婚は許されない、ミユリエルも亦父との間に気兼ねして待てと言います。性の衝動に堪えかねたジキル博士は、再び、不思議な薬を飲みますと、たちまち怖るべき悪魔ハイドになります、ハイドは実験室の裏口から街に出て、その怖るべき姿を、さきに治療してやったアイヴイのいる酒場に現します。そしてあらゆる兇暴性を発揮して、アイヴイを囚にして、その兇悪な本能を満足します。

その後彼は幾度となく、ハイドとなつて恐れおののく彼女を弄びます。

しかしそれから少しして後、ケリユウ將軍はミユリエル嬢とジキル博士の結婚を一ヶ月後になすべきことを許し、明晩は正式の晩餐会を開いて、いよいよ二人の結婚を近親や友人に披露することを告げます。ジキル博士は喜んで雀躍しつつ帰つて来て老僕エドガアを喜ばせます。

酒場の女アイヴイは、悪魔ハイドにとりつかれたことを悲歎していますと、そこへジキル博士からだと言つて五十円の金が逸られます。

「まあ何という親切な博士だろう。あの方は天使だ。あの方ならきつとハイドの手から私を救つて下さるにちがいない。あの方に相談しよう。」

この五十円こそ、こうしたハイドの悪魔から永久に自分を救いミユリエル嬢と結婚して、再びアイヴイを苦しめまいとするジキル博士の親切であつたにちがひありません。

やがてアイヴイは、ジキル博士をたづねて泣き狂ひつつハイドのことを訴えて救つて下さいと懇願し「私はどんなに身を粉にしてもあなたのために働きます。私はどんなことでもします」と誓います。ジキル博士はこの可憐な愛人を哀れみ、ハイドを再び行かせない、必ず救つてやると誓います。

善良なる神士ジキル博士は、いよいよ婚約披露の晩餐会に出席するために出かけます。だが途中公園の樹の上に、明らかにさえずつていた小鳥が、獣に殺されゆく相を見た時、彼は、薬をのまなくても、自然に怖るべきハイドのすがたに変わつてゆくのでした。彼はもう、薬を通じなくてもちよつとした怒り、悲しみ、情欲があらわれた時には、自然に悶絶の後、ハイドに変わつてゆくのでした。

ハイドはケリユウ將軍の宅には行かないで、アイヴイの宅にその相を現します。再びハイドは来ないと信じて朗らかに歌つていた彼女は、再び悪魔ハイドの姿を見るや、驚愕の末、逃げようとしませんが、

「アイヴイ！ お前は俺から逃げようとするな、お前はジキル博士に五十円もらい、そしてハイドから救つてくれとたのみ、あなたを愛すると言ひ、どんな苦しいことでもすると言つたな…」と言いつつ、逃げ惑う小鳥のような彼女を追いつめ、遂に俺はジキル博士なのだと告げつつ彼女を殺してしまします。警官隊に追われた彼は、自分の宅にかえりませんが、内に入れてくれません。ハイドは仕方なく、友人ランソン博士に手紙を送り、ジキル博士の実験室から、数種の薬物を持ってきてもらうことを頼みます。ランソン博士は、ハイドに、ジキル博士の生存を知らせなければこの室からこ

の薬を持つて出ることを許さないと、ピストルをつきつけます。進退きわまつたハイドはついに、ランソン博士の前で「何がおこるか見ていろ！ 如何なる奇蹟がおこつて驚くな」と叫びつつ、薬を合せて飲みますと、そこには、神士ジキル博士があらわれます。ランソン博士はおどろきます。二人はこのおそるべきジキル博士の発見について語りますが、その一節に、

「君たちは、人間の性を善と悪に分解する科学の力を笑殺したが、俺はそれに成功したのだ。」

「君は恐ろしいことに成功した。だがそれは人間に与えられた領域を超えている。許された範囲をこえている。君はやがてその責を受けねばならない。」

ジキル博士は深い後悔と苦悶とに陥り、再びこの薬を用いないことを誓います。

披露宴は、ジキル博士が出席しなかつたために、めっちゃめっちゃになり、多くの来客たちは待ちぼうけになつたまま帰つてゆきます。でもまだミュリエル嬢は、ジキル博士を信じています。父ケリユウ將軍は怒つてしまいました。

深い深い後悔に陥つたジキル博士は、良心の責めにたえかねて、翌日ミュリエル嬢の家を訪問して、泣いて「救います、ゆるします」と愛を求める嬢にむかつて

「私は、あなたとの婚約をすてます。私は地獄です。救いからもれ、神の厳粛な罰の裁きを受けねばならない人間なのです。私は決してあなたと結婚するに値しない呪われた悪人です。」と大地に伏して許しを乞い、猶も懇願される愛人の求めをしりぞけ、狂ひ泣く嬢を残して外に出ます。

だが愛別の苦にひかれて、再び帰り来り、ピアノの上に泣き悲しむ嬢をガラス戸越しに見た時、彼の中にわきおこる情欲は、遂にジキル博士を悶絶せしめ、おそるべきハイドにしてしまいます。悪魔は再び室に入ります、ミュリエル嬢は、ジキル博士かとふりかへつた瞬間おそるべきハイドの相を見て、驚愕、恐倒、逃げまどう悲痛の声に音に、かけつけた父ケリユウ將軍。そこに大格闘が始められて、遂に、嬢も將軍も悪魔ハイドのために殺されてしまいます。

警官隊に追われハイドは急いで実験室にかえり、薬をのみますと神士ジキル博士になります。戸をけやぶつて乱入した警官隊にハイドは裏口から逃げたと言いますが、そこにいるランソン博士が許しません。「悪魔は逃げてはいない。そこに立っている！」その言葉を聞いたジキル博士は怒つたため再びハイドに変わつてしまいます。彼は狂暴兇悪の限りをつくして戦いますが、遂に高い所から実験台の上におちて死にます。人間としてふるるべからざる神域に手を出した彼は遂に「我れ魂を失へり」と叫んで業火の中に堕ちて行つたのです。

けれども死の刹那、そこに横つてゐるのはハイドではなくて、善良なるジキル博士でありました。

天使ジキルと、悪魔ハイドは同一人でありました。天使ジキル博士がある時、悪魔ハイドはかくれています。悪魔ハイドがあらはれた時、天使ジキル博士は消えています。

人間は本能を持っています。野獣のような本能が時に悪魔となつて兇暴を働きます。だが人間は同時に理性を持っています。身をすてて人を救い、時に天使のような働きをします。

如何なる美しい愛の活動も、崇高なる善行も、人間がするのであります。聖者も人も人間であります。しかし如何なる悲惨なる野蛮行為も、酷悪なる兇暴も亦人間がするのであります。

天使となるか、悪魔となるか。

人生におこる一切の事柄が、天使ジキル博士の血と、悪魔ハイドの血の、濃厚なのを、或は淡いのを、或はその一割を、五割を十割をまぜ合せておこっているのにすぎません。

子供が、無心に遊ぶ蛇を見て、なぶり殺しにしている相の上に、小さいハイドの相を見、雨の路傍に倒れて泣く幼女を抱き起こしていたわっている少女の上に、小さきジキル博士を見ます。

物すごい人相の男が、横暴、強準殺人、強姦………彼の上にハイドを見ます。暗い運命に泣く人たちの中に立つて、一切の苦を一身に背負つてしかも快活に働いている人の上にジキル博士の相を見ます。

不満と後悔

ハイドのなす悪逆は、やがてジキルの悩みとなります。ハイドが彼の兇悪な享樂からさめた刹那は、ジキルの深い悩みの始まる瞬間であります。ハイドは常に満されたい欲念に追われ、ジキルは常に救われない後悔の深淵に泣きます。不満と後悔は、救われない者の心情であります。

人間

人間はどんなに本能だけになりきつて爛れた享樂に沈もうとしても、理性の声を消すことは出来ない。理性だけが勝利者となつて本能を無視しようとしても、本能はこれを消滅することを許されない。もしケリユウ將軍が、彼とミュリエルとの結婚をもっと早く許していたならば、彼はハイドのために斃れなかつたかも知れない。彼は人間であつた。

悪魔の役割

ジキルは、初め不可思議な薬物によつてハイドとなつたが、後には何等薬を使わなくても、少しの怒りにも、悲しみにもハイドとなつた。悪はしばしばくり返すことによつて馴れて平気が出るようになります。ハイドはかくしてジキルを滅ぼすことによつてのみ、その悪魔としての役割をはたします。

この刻々に沈む深淵を見て愕然として驚き、これに勝ち得たのが過古の聖者たちではあるまいか。ゲーテのファウストに於いてこれを見る。

ハイドのために、ついにあたらし人生を台無しにして、遂に不安と、後悔と、愚痴と、暗黒のままに、大地を終ろうとする敗慘者をあまりに多く見せつけられます。悪魔は滅亡の支配者である。

善と悪

ハイドは、彼の業火に斃れました。彼には常に自滅より外に道はありません。ハイドが斃れた時、そこに横ついていたものはジキル博士の死体でありました。天使がそこに死んでいることが即ちハイドの死んだことであります。

ハイドが死ぬる時、天使をも亦殺すとは大地の実相であります。

一人の大臣が兇手に斃れる。その時、悪漢が自分の滅亡の世界に進んでいる時であります。

我等はそこに善悪一如の世界を見ます。

救う道

もしハイドが斃れずに救われたとしたならば、ジキルをも殺さずにすんだことではありません。ハイドは警官隊に追いつめられました。しかし、ジキルを助けるとは、ハイドを追いせめて行詰らすことではなくて、ハイドを救うことであります。本能的に充たされない人間を、上から厳しく抑えると、ハイドは多くのジキルを斃しておいて自ら滅びの道をゆきます。

世界の大勢、民族の動き、国家の現状、我等は多くのおいつめられたハイドが至る所に兇暴を發揮しているのを見ます。

念仏道

ハイドはすでに、多くの人を殺しつつも、実験室に帰った後の彼はハイドではなくて神士ジキルだったのです。友人ランソン博士は方法をあやまりました。彼の罪の裁きが、冷たさが再びジキルをハイドにしました。彼は今、ハイドからさめて理性をよくみがえらしていたのです。もつとはつきり光を、後悔を、自覚を、そして理性自体の行詰りから、やがて、三定死の宿命へ、更に一切を超えて懺悔の大信海へ導かるべきであつたのです。

親鸞聖人の歩まれた世界がそれでありました。

南無阿彌陀仏は、ハイドとジキルを超えたる絶対善であり、無碍道であります。私たちは歎異抄の聖語を味うべきであります。

「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすと知るべし。その故は、罪悪深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にたまします。しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なき故に、悪をもおそるべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき故にと。」

「善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや。………煩惱具足のわれらはいづれの行にても生死を離るることあるべからざるを憐みたまいて願をおこしたもう本

意、悪人成仏のためなれば他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。よて善人だに往生す、まして悪人はと仰せ候ひきと。」

「念仏者は無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪悪も業報を感ずることあたはず、諸善も及ぶことなき故なりと言々。」

ハイドのために傷つけられたジキルの上には、冷たい裁きと彼をおびやかす権力が働くべきでなくて、悪人正機の南無阿弥陀仏が廻向さるべきでありました。そこにもみ、ジキルは後悔より救われ、ハイドは合掌の中にひれ伏したでありましょう。

ジキルはハイドにならなければ、ハイドの姿を見ることが出来なかつたのです。ジキルのままでハイドの兇暴を内省することが出来たならば、彼はハイドと共に斃れなかつたでありましょう。

自利利他一如

自害害彼、彼此俱害、……：…… 自らを害する時、他を害します。自利害彼（自らは利しつつ、他を害する）と考えるのが凡夫であります。自利した時、それは利他を成就しています。自利利他一如こそ仏教の大理想であります。善悪共に助けられる広大なる世界がなくてはなりません。南無阿弥陀仏の中にそれを信じます。

薬と毒

我等は神秘的な薬を使つてはハイドになります。それを親鸞聖人は「無明の酔い」と6言われました。

末燈抄に曰く

「仏の誓を聞きはじめしより無明の酔もよう／＼少しづつさめ、三毒をも少しづつ好まずして、阿弥陀仏の薬を常にこのみ召す身となりて在しましあうて候ぞかし。しかるになほ酔ひもさめやらぬに重ねて酔ひを勧め、毒も消えやらぬになほ毒を勧められ候らんこそあさましく候へ。煩惱具足の身なればとて心にまかせて身にも為まじきことをも許し、口にもいうまじきことをも許し、意にも思うまじき事をも許して、いかにも心のままにてあるべしと申しあうて候ふらんこそ返すがへす不便におぼえ候へ、酔ひもさめぬさきになほ酒をすすめ、毒も消えやらぬにいよ／＼毒を勧めんがごとし。『薬あり毒を好め』と候ふらんことはあるべくも候はずとこそおぼえ候。」

この御聖教は決して悪人正機の救いをゆがめずして、真実道をいよいよはつきり伺うことの出来るみ教であります。

理性と本能、善と悪、天使と悪魔、理想と現実、私どもは誰も皆この問題を私の上へに解決をつけねばならぬ課題として与えられています。私どもがこの大きな課題から遠ざかっている時、我等はハイドによつて占領されている時でありましょう。